鳥羽伏見 最後の戦闘

考証・画・文
藤井尚夫

慶応四年（一八六八）一月三日に始まった鳥羽伏見の戦いは、数に勝る徳川軍はまとまりがなく、次々と敗退する。この時の徳川軍の本陣は、大坂城であった。

一月六日、徳川軍で戦意旺盛な会津藩や新選組は、新政府軍の大坂平野進出を、山崎の隘路（あいろ）で阻止しようと、隘路の南の久修園院を足場に陣を構えた。

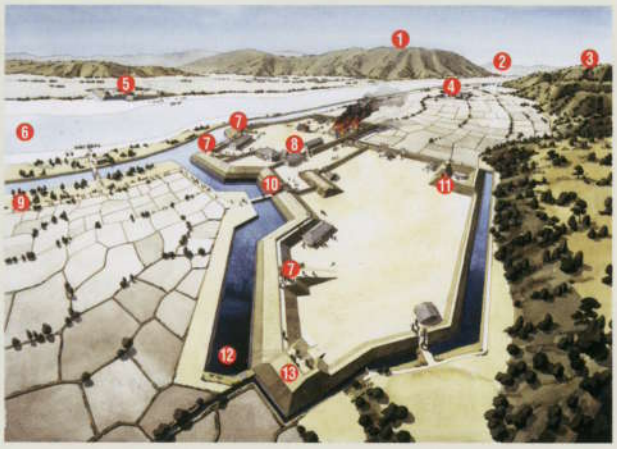
久修園院の南西には淀川の防禦のための、土塁と水堀で囲まれた楠葉砲台があった。だが楠葉砲台は大坂方面が正面だったので、新政府軍には後ろ向きになる。しかし、番所や火薬庫があり、後方陣地として利用可能であった。

六日の昼近くになり事件が勃発する。淀川の対岸の、高浜砲台を守備していた徳川側の津藩（藤堂家）が寝返ったのである。高浜砲台に新政府軍が入りこみ、備砲で楠葉砲台を砲撃しはじめた。

楠葉砲台も黙っておらず、橋本砲台に向け発砲する。ここに砲撃戦が開始されたが、これが徳川軍最後の抵抗だった。徳川軍は、楠葉砲台の弾薬を使い尽くして撤収する。以後、徳川軍として戦うことはなかった。

秀吉が天下を取った山崎合戦から二八六年目、また天王山の麓で新たな天下が始まったのである。

藤井尚夫（ふじい・ひさお）
一九四七年富山県生まれ。工業デザイナー（OA機器・家電・宇宙開発施設などのデザインを手がける）。歴史関連の仕事として、地方自治体の市史、町史編纂、戦国城郭の発掘・整備指導。歴史放送番組制作。主な著書に『中世の城と合戦―復元イラスト』『フィールドワーク 関ヶ原合戦』（ともに朝日新聞社）『ドキュメント戦国の城』（河出書房新社）などがある。



❶ **天王山**　摂津と山城の境の山。この山の南東麓（画では右下）が山崎の宿。
❷ **京都盆地**
❸ **男山**　石清水八幡が建立されている。男山と天王山との間の平地は1300mしかなく、南北朝、戦国時代にもこの隘路は戦場になっている。鳥羽伏見の戦いでは、新政府軍は、隘路とともに男山を越えて摂津に進攻している。
❹ **久修園院**　天平期から存在している古刹。鳥羽伏見の戦いでは、淀方面から敗退した会津兵や新選組は、この久修園院を拠点にして山崎の隘路で戦おうとした。
❺ **高浜砲台**　淀川を京都に向かって攻め込む軍艦を撃退するため、元治元年に楠葉砲台と共に造られた砲台。鳥羽伏見の戦いでは、津藩（藤堂家）が守備していたが、新政府軍に寝返り、楠葉砲台を砲撃した。
❻ **淀川**　大坂と京都を結ぶ重要な水上交通路であった。
❼ **楠葉砲台の砲座**　楠葉砲台には三箇所に砲座が造られていた。
❽ **楠葉関門の番所**　元治２年に砲台とセットで新設された関所。大坂方面から京都に入る通行人を吟味した。
❾ **大坂と京都を結ぶ街道**
❿ **楠葉関門の正門**
⓫ **火薬庫**　淀川の軍艦との砲戦を想定し、火薬庫は川から遠い位置に置かれた。
⓬ **水堀**　砲台の正面の水堀は幅が広いが、背面の京都側の水堀の幅は狭い。
⓭ **塁壁の高段**　砲台の東には丘が迫っており、塁壁の東端のみ高く造られていた。

淀川防衛と楠葉砲台（台場）

幕末騒乱の時、幕府は朝廷の攘夷の意を受け、外国船打ち払いの砲台（台場）築造を各大名に命じた。大坂湾から京都にいたる淀川水運もこの防衛計画に組み込まれていた。元治元年（1864）京都盆地の入り口の山崎の隘路を選び淀川の東側に楠葉（くずは）砲台、西側に高浜砲台の、２砲台が築造された。楠葉砲台は、西欧風の稜堡塁壁を主面にし、３門の砲座がおかれている。

楠葉砲台は、関所としての機能を持ち合わせ、関所としては、元治二年から稼働している。大坂から京都への街道は、砲台の中央を通過するように配置され、通行人吟味の番所が置かれていた。

徳川軍が拠点とした久修園院（左の寺院）と、その背後は淀川の対岸の天王山。

楠葉砲台の現状。現在は水田と住宅地になっている。一部の道路は当時の道路と重なる部分もあるが、明確な遺構はない。高浜砲台は河川敷となり、ここは全く痕跡を残さない。楠葉砲台は、橋本砲台とも呼ばれた。